

財政再建団体となった 有田町の教訓



青木類次元有田町長

昨今の新聞紙上やテレビなどで報道されている北海道夕張市が赤字再建団体に陥ったというニュースは、有田町にとっても決して他人事ではない、関心の高い出来事ではないでしょうか。

実は昭和40年、旧有田町(以下有田町と略)もこの「財政再建団体」となった歴史があります。それからすでに40年以上が経過し、その時代を記憶されている方も少なくなってきましたが、その経緯は次の通りです。

有田町の昭和39年度の決算は一般会計と上水道事業会計の両方の決算見込み額を合計すると8300万円の赤字が見込まれました(その後7640万円に確定)。そこで、町は40年2月25日付けの「有田町広報ARITA」で特集を組んで現状を説明し、町民に理解を求めました。

まず赤字の原因は教育施設を始め、し尿処理施設、上水道、母子健康センターなど社会福祉施設の建設や国道の舗装整備、都市計画街路の整備など公共事業の実施による財政需要の増大と、人件費などの経常経費の重圧が、町の財政状況を悪化させたと説明しました。

その後、昭和40年度初の定例町議会では財政再建の審議を重点におき、自主再建にするか、あるいは再建整備法の適用を受けて再建を進めるかの二者択一の審議を行いました。この再建整備法とは「地方財政再建特別措置法」の通称で、借金を国に肩代わりしてもらい、町は毎年一定額を国に償還していくというもので、この期間中は国から財政・予算の両面について厳しい規制と指導が行われることとなります。

この重要な選択を迫られた町では町内各地区や各種団体の代表者に説明をして多くの意見を聴取した結果、町執行部の決定を受けて町議会は国の再建整備法を可決し、40年5月14日に自治大臣宛に同法適用の申請を提出しました。5月下旬に自治大臣から財政再建計画を承認するとの通知があり、有田町は財政再建団体となりました。

そのころの町の年間予算は2億4千万円ほどです。その中から7640万円の財政赤字を昭和45年までの5年次計画で解消していくための財政再建計画の概要は次のとおりでした。

歳入面では

- ① 税の徴収歩合の引き上げに努力する。
- ② 固定資産税の基礎資料が古いので、正確さを期すために地籍調査を実施する。
- ③ 使用料、手数料の適正化を図り徴収率を向上させる。
- ④ 財政管理を的確にし、不要財産は払い下げ処分を積極的に推進する。

など。

歳出面では

- ① 特別職の報酬・給料は類似団体以下とし、第三者による審議機関を設置する。
- ② 一般職の員数を134名から120名に減員する。
- ③ 物件費を最大限に節約する。
- ④ 町からの補助金などは財政能力に応じた枠内にとどめ、出資金・貸付金・預託金は目的や効果を検討して支出する。
- ⑤ 公債費の元利償還額の減額を図り、新しい地方債発行も最小限にし、一時借入金の利子も節減を図り、予算の配当制度を強化する。

など。

しかし、夕張市と決定的に違うのは、このような事態に陥った時に何もしなかった、できなかったということはなかったようです。例えば、41年のてんじん保育園をはじめ各町立保育園の新設、44年の10区公民館など各地区公民館の建設などは行なっていますし、40年には白川で天狗谷古窯の本格的な発掘調査が三上次男東京大学教授の指導のもとで行われ、42年には有田焼創業350年祭の式典を白磁ヶ丘・石場内で行なっています。

当時有田町役場に勤めた方々は異口同音に「給料の遅配などもあり大変だった」と、その苦難の時代を語っています。しかしながら、時代の流れが高度成長期に入っていたことも追い風になったとは思いますが、当時の青木類次町長はじめ有田町のリーダー達は、町の顔ともいえるべき有田焼産業の発展のために何を取捨選択すべきかを判断し、やるべきことはやりながら5年後の昭和45年には借金を完済したのでした。



季刊

皿山

2007

春

No.73

有田町歴史民俗資料館・館報

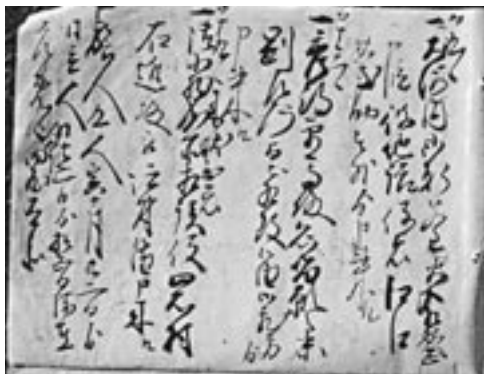
新発見の皿山代官日記

～成富作兵衛代官が残した日記～

このほど佐賀県立図書館による近世史料調査の過程で、黒土原成富家資料の中に有田皿山代官であった成富作兵衛という人物が残した日記(以下成富日記と略)が発見されました。

治水事業で名を成した成富兵庫茂安を祖とする成富作兵衛は、今から200年前の文化2年(1805)7月から同4年(1807)9月までの約2年間、皿山代官を勤めています。成富日記の中には代官所の仕事である運上銀(営業税)を佐賀本藩に納めた金額や方法、窯焼きに対する藩や長崎代官などからの焼物注文の取り次ぎ、伊万里津に入港した諸国からの焼物商人の出入り記録などと共に、泉山・弁財天神社や大樽・八幡社の祭り、伊万里津に滞在した筑前や長崎の医者などのことも記録しています。

成富日記が書かれたのは成富作兵衛が代官を勤めた2年間の中の、さらに文化3年2月から同4年3月までの1年間というわずかな時間ですが、記録の少ない有田皿山の歴史の中では、代官所の仕事や皿山の人々の暮らしが偲ばれる貴重な資料です。



「有田皿山代官記録 仮目録・黒成04-17-14紙背文書」
(寄託先：佐賀県立図書館)

〔代官所の仕事〕

皿山代官所は現在の白川地区、森病院が建っている場所あたりにありました。それ以前は、初代皿山代官を勤めた山本神右衛門重澄のころ、現在の大木宿にあったといわれています。旧道沿いの宮の松酒造近くには、代官所跡の標柱が立っています。

大木から白川へ移った時期ははっきりしませんが、有田皿山での磁器生産が軌道に乗り始めた、そう遅くない時期に内山の白川に移転したと考えられます。

代官所の役人は佐賀本藩から赴任しましたが、記録によれば、皿山代官のほか、郡目付、取納役など20人から25人の役人がいました。

彼らは先に述べた徴税のほか、石場や口屋番所の警護、伊万里・有田郷の住民へ手頭(掟)などの読み聞かせを行ったりしました。

〔成富代官のころの有田皿山〕

成富作兵衛が皿山代官に就任したのは53歳、九代目の佐賀藩主・鍋島齊直が家督相続したころでした。先代藩主治茂の時代、享和3年(1803)に大坂の新問屋による「見為替仕法」という有田焼専売制度が実施されています。これはそれまでのやり方では利益が上がらず、皿山は疲弊するばかりであるという有田皿山の願いによって始まったとされ、窯焼きの保護のためには中間介在をできる限り排除することが有効とされました。

このことを裏付けるように、成富日記の文化2年2月28日の記事には辻喜三郎が上京するために、往来切手を願っていますが、当時は陶器御仕組も半ばであるので、焼き物に関わる者が旅にでるといのは如何なものかということで、代官のほうでじっくりと調べてから藩へも報告をするようにという達しが代官所に来ています。

この辻喜三郎という人物は、有田皿山で初めて禁裏御用品を焼いた辻精磁社の先祖にあたり、八代辻喜平次のことです。おそらく、禁裏の仕事に関わることで、京都への旅を願い出たものと思われる。

また、御仕組も半ばというのは見為替仕法に代わったことをさすものと思われる。

〔伊万里・有田郷の人々の暮らし〕

成富日記に出てくる皿山の人々の中に、盗みに入られた岩谷川内の針尾卯吉がいます。彼は文化6年(1809)に独占専売権を与えられた絵葉座商人11人のうちの一人です。

また、上幸平に住む絵書き職人の与平次は、親の代から同所の窯焼き重五兵衛のところで働き、正直者で親に孝養を尽くし、幼子も良く育てているということで役内科代集銀、すなわち罰金として集めたお金の中から褒美を与えられています。

同じ日に下目付の坂井久兵衛らは、隠れ赤絵屋を見つけたということで褒美をもらっています。残念ながらどこにその隠れ赤絵屋があったのか、どのような製品を焼いていたかなどの詳細は記録されていません。

文化2年8月15日(旧暦)に、大樽山の八幡社の祭礼で浮立が行われたとあります。この八幡社は現在の陶山神社のことで、成富日記から祭礼は8月に行われていたことがわかります。神社の名称は明治4年に現在の陶山神社にかわり、祭礼はそれより早い文化11年(1814)から9月23日に改められたことが「制度考」

(明治20年・1887)という資料にあります。

秋になると見事な紅葉で私たちを楽しませてくれる大イチョウがある泉山の弁財天神社には、このころ法光庵という寺がありました。その存在は「皿山雀」(享保16年・1731)という資料でわかっていましたが、本寺が鹿島藩主の菩提寺である普明寺であったことが成富日記からわかりました。そして、この年が弁財天を安置して200年になるというので、法要が執り行われています。ということは、1600年代の初めに法光庵は存在したということになります。



泉山弁財天神社境内にある庵主のものと思われる墓碑

皿山代官の支配の範囲は伊万里・有田両郷ですから、当然伊万里のことも記録されています。文化3年8月10日の夜八ツ時といますから深夜1時から3時ごろでしょうか、伊万里津中下町から出火し、50軒ほどが焼失しました。幸い、高札役屋敷などは焼失を逃れたようです。

また、伊万里津には当時医者がいませんでした。そこで、筑前の医者・納富春仙や長崎の外科医・榎林泰助が滞在して治療を行ない、その滞在延長願いが伊万里津の別当たちから出されています。

伊万里津には遠くは越中富山や出雲を始め、紀州や筑前など全国から焼物商人がやってきたことも記録されています。長い人では100日から150日の滞在願いが出されていますが、この間商いのほかにどのような過ごし方をしていたのか興味のあるところですが、そのあたりのことは成富日記からは読み取ることができません。

しかし、伊万里へ来た紀州箕島の久四郎という焼物商人は伊万里へ向かう船中で病気となり、伊万里津の太兵衛の所で療養していたところ、薬石効なく亡くなってしまったことが記録され、多くの商人が焼物商売のために伊万里津にやって来て、そこにはいろんなドラマがあったことがわずかながらですが、成富日記からもわかります。

〔焼物生産に関わる事柄〕

皿山代官所の仕事の一つに、焼物生産に関わる事柄があります。例えば嬉野山の窯焼き3人から新しく名

代札を許可して欲しいという願いが出され、そのことは小物成所へ報告し、同所より窯で使用する薪の願いは六府方という役所へ出されています。

また、応法山からの絵葉購入願いは御懸硯方へ報告するという、それぞれの願いがどの役所へ通達されたかという流れも、成富日記から知ることができます。

佐賀藩主の御用品は大川内山で生産したことはすでにご存知だと思いますが、そのほかに有田皿山の窯焼きで前述の辻家には香炉や重箱を、酒井田柿右衛門家にも茶瓶やお茶碗などの注文がなされ、酒井田家では焼き上げた品を直接本人が佐賀へ納めています。

佐賀藩主のほかに、長崎代官高木作右衛門から砂糖漬け用の7升入りの壺20個の注文がきていますが、これは窯焼きの徳太夫に急いで焼くようにと伝達されていますが、徳太夫というのは稗古場の窯焼きと思われる。

皿山の歴史を伝える資料に、もう一つ「皿山代官旧記覚書(以下代官旧記と略)」というものがあります。代官所で取り扱った事柄に関する覚え書きで、延享3年(1746)から天保2年(1831)の85年間に起こった出来事を記録しているものです。

この代官旧記と成富日記には共通する出来事を記録していることもあり、上記の徳太夫が稗古場登り(窯)の窯あげに際し、役人の立会いなしに勝手に窯を開封したことで処罰を受けたことなどは両方の資料に出きます。

皿山代官成富作兵衛はその後、文化4年9月に御吟味所附役に転任し、文政7年(1824)6月12日に亡くなりました。享年73。

有田は文政11年(1828)に大火があり、それ以前に書かれた資料は焼失したというのが定説で、実際に有田に関してはそれ以前の資料というと代官旧記のほかにあまり残っていません。成富家の子孫に残された日記は、皿山の外に残った貴重な資料です。その期間は1年というわずかな時間ではありますが、有田で暮した代官が残した記録は、これまでに知られていない事柄も多くあり、有田の歴史に新たな史実が加わったともいえます。

今回の資料の発見は、佐賀県立図書館が行った近世資料調査の成果です。改めて、成富家はじめ関係各位にお礼申し上げます。

参考文献

- ・「有田町史 陶業編Ⅰ、政治社会編Ⅰ」
(宮田幸太郎 前山博 池田史郎著)
- ・「有田皿山の制度と生活」 (宮田幸太郎著)
- ・「皿山代官旧記覚書」 (池田史郎編)

明治有田の立役者・ 手塚亀之助、松尾儀助子孫、 有田町へ

昨年12月19日(火)、明治9年のアメリカ・フィラデルフィア万国博覧会に有田から参加した香蘭社社員・手塚亀之助の子孫である梁井浩二さん夫妻(茅ヶ崎市)と、元佐賀藩士で起立工商会社社長松尾儀助の子孫である田川栄吉さん(鎌倉市)が郷土史研究家末岡暁美さんの案内で来館されました。

迎えたのは、深海墨之助や百田恒右衛門の子孫に当たる松尾悟さんや町内の研究者である蒲地孝典さん、蒲地豊さん。幕末から明治初期にかけて有田の激動期を支えた人々の話に花が咲きました。



左から末岡さん、田川さん、梁井さん夫妻

この中で梁井さんは明治31年、アメリカ人女性と結婚した亀之助の長男国一の子孫がボストン郊外に健在であることを探し当て、交流が始まったことなどを話されました。

田川さんは第二次世界大戦時の空襲で東京にあった写真や記録一切が焼失した松尾家のことを調査中で、明治6年のウィーン万博に参加した人々が写った集合写真に松尾儀助がいるはずと、その成果を披露されました。

有田側の蒲地孝典さんは、昨年上梓された著書の執筆経緯や、現在進んでいる精磁会社の製品の再現などを話され、松尾悟さんは有田やそれを取り巻く社会の変遷をまとめられたものを披露されました。

100年以上の時間が経過し、すでにわからなくなった史実もありますが、こうして先祖が浅からざる因縁を持つ人々が一堂に会し、エピソードや家族に伝わる話などを聞くことで、新たな歴史が解明されていくものだと思います。

有田人の書籍

『平成18年 有田町3区 秋祭』

昨年の秋祭り・おくんちは3区が当番町として執り行われました。その折の様子と、おくんちの歴史をまとめた「平成18年 有田町3区 秋祭」(定価 1部1,000円)が3区から出版されました。

おくんちは江戸時代から続く陶山神社の祭礼ですが、3区の祭りに関しては昭和9年の大樽、翌10年の本幸平の当番の折にも写真集が出版されました。これは70年ほど前の有田の様子を知る上でも貴重な資料となっています。

今回の写真集も50年後、100年後の人々が懐かしがって読むような、楽しいそして貴重な資料となるものと思います。残念ながら発行部数が少なく、残部はわずかとなっていますが、詳しくは本幸平・秀昇さん(電話43-2461)までお問い合わせください。



【新資料の紹介】

新たに町内外の方々から寄贈していただいた資料を紹介します。

- | | | |
|-----------|-----|-------------|
| ・色絵蓋付き碗 | 1点 | 橘周次郎様(長崎県) |
| ・唐箕ほか | 10点 | 田島陶土様(南原) |
| ・当座通帳ほか | 2点 | 肥前陶磁器商工組合様 |
| ・戦時中の皿 | 1点 | 萩谷茂行様(東京都) |
| ・道路改修の歌ほか | 1点 | 山内照子様(佐世保市) |
| ・色絵皿ほか | 19点 | 篠原充様(稗古場) |
| ・書籍ほか | 2点 | 瀬戸口三枝子様(中樽) |
| ・磁器製水筒ほか | 1点 | 福田隆行様(上幸平) |

ありがとうございました。

季刊『皿山』

通巻73号 (平成19年3月1日)

編集・発行 有田町歴史民俗資料館

〒844-0001 佐賀県西松浦郡有田町泉山1丁目4-1

☎0955-43-2678 FAX0955-43-4185